

小さくても輝くまち 下山学区

SHIMOYAMA



てがたないわ 下山の民話 弁慶の手刀岩

むかし、弁慶が、まだ比叡山の修行僧だったころの話です。東山道から東海道へ今の諏訪から飯田を通して、野をこえ山をこえて修行の旅をしていました。

弁慶が保久の村まで来た時のことです。大勢の人が集まって、わいわいがやがやと何事かやっているのです。そばへ行ってみると、大きな岩が三つ、道の真ん中にとんと座っているのです。村の若者が数人かかって、それを動かそうとしているのです。が、岩があまりにも大きくて重いので、びくともしません。一人の若者が、
「じっさまよ。いくらふんばつてもびくともせん。どうすりやあいいかのう。」
「さて、困ったもんだのう。こんだけ大勢でも動かんじや、どうするがいいかのう。」

村人達は、ただ困った困ったと言っばかりです。「しようがない。まあいっぺんやってみるか。えんやこらしよ。」
村人は、岩を動かそうと、一生懸命がんばります。でも、だめです。岩は、びくともしません。と、その時、
「わっはっはっは。」
とつぜん大きな笑い声が聞こえてきました。村人達が笑い声のする方を見ると、何と大きな旅の僧が腹をかかえて笑っているではありませんか。

「な、な、ながおかしい。」
岩に手をかけていた一人の若者がどなると、「そうだ、そうだ。そんなにおかしいならお前がやってみろ。」
と、別の一人が言いました。弁慶は、「よし、やってやろう。ところで、この岩はど

こへかたづければよいかな。」
本当なら川ぶちへ落とせばよいものを、笑われた腹いせに、
「あの山の尾根へ持って行ってくれ。」
と、西の山を指しました。すると別の一人が、
「あっちの山へもだ。」

と、東の山を指します。弁慶は三つの中の一番大きな岩を選ぶと、両手で軽々と持ち上げて西の山へ登って行きました。そして、尾根まで来ると、岩を「ドスン」と投げ出しゆうゆうと下りて来ました。あつけにとられている村人をしり目に、二つ目の岩を東の山へと持って行ってしまったのです。びっくりした村の長が、「おぼう様、ありがとうございませう。もう、この岩は山の上まで持って行ってくださらなくてけっこうです。どうか、あの川ぶちにすててください。」

と言いました。弁慶は笑いながら、三つ目の岩を「バシッ」と手でくつき、西の山へぽんと投げあげました。その夜、弁慶は村の長の家に泊まることになり、大変なもてなしをうけました。翌朝、弁慶は西の山に登り一番大きな岩の前に立つと、「えいつ」と手刀で岩を真っ二つに割り経文をほり、いずこともなく去って行ったのです。

村人達は、後にその旅僧が弁慶であったことを知り、経文をほった岩を「弁慶の手刀岩」と呼ぶようになったということです。



「ぬかたの民話1」より



編集後記

人口減少という現状を踏まえ“地元をもっと好きになってほしい”“この地へ訪れてほしい”という思いを込めました。地域を見つめ直す討議を重ねるうちに故郷の素晴らしさを再認識でき、仲間と話し合った時間もかけがえのないものとなりました。下山の魅力を伝え、未来を描く一冊となれば幸いです。

[作成委員会] 太田政敏/岡田正光/小久保好二/
柴田秀和/杉浦立美/高木田洋/竹内昭博/成瀬健/
平木順子/星野孝子/星野光弘/山田伸成/渡辺昭典



〔表紙写真〕 小学校校庭で地域を見つめ続けてきた山桜。地域のシンボルである山桜の古木と未来をひらく元気な子どもたちと一緒に撮影しました。約20年前に弱ってしまっていた古木は有志の手で元気を取り戻し、平成28年1月には「岡崎市ふるさとの景観資産」及び「ふるさとの名木」にも選定されました。
〔参考資料〕額田町史/下山村治概要(イラスト)中島純一



1 廊下の間に障子で仕切られていた教室。昭和26年の改築まで使用



2 赤ちゃんの無事誕生を願う妊婦さんの心強い施設、下山母子保健所



4 赤い屋根の校舎の全景



3 昭和28年頃に始まったパン給食。子どもたちのコッペパン初体験だった



5 自由形の模範泳法を披露した前畑さん。多くの人たちが集まった

理想のコミュニティを目指す

下山のなりたち

一八七二年・明治5

学制発布。8月22日に下山小学校の前身である

一八七七年・明治11

保久郷学校(移風学校)が開校する

一八八〇年・明治13

伊賀谷と中保久が中伊村に、桃ヶ久保は小久田村となる

一八八〇年・明治13

保久郷学校を保久学校と改称

一八八九年・明治22

町村制施行により、額田郡下山村が誕生する

一八九二年・明治25

新村に併せて3校を統合し、下山尋常小学校となる

一八九三年・明治26

小学校の校舎が現在の位置に新築移転される

一八九九年・明治32

小学校に高等科(3年)を設置し、

下山尋常高等小学校と改称

自治組織「郷榮会」発足。小学校に高等補修科(1年)を併設

小学校校舎(障子の学校)竣工…1 保久駐在所設置

下山村産業組合(農協の前身)創設

下山に初めて電灯がつく

下山村役場に電話を敷設。また、保久郵便取扱所を開所

隣保事業組合創設。下山母子保健所(隣保館)開設…2

村報『郷榮』創刊(昭和19年2月〜29年9月は休刊)…3

町村制施行50年に際し、模範村として

県内で唯一内務大臣表彰を受賞

学校教育法により、下山小学校と改称。新制下山中学校創立

下山小学校の赤い屋根の校舎竣工…4

町村合併促進法により、4村が合併し額田町発足

桃ヶ久保が形埜学区から下山学区となる

保久―土―東岡崎のバス路線開通

新生活運動指定地区となり、全国町村長会より表彰される

有線放送開始。小学校に現校歌ができる

下山保育園開園。小学校校訓が「みんな仲よく力いっぱい」となる

下山中学校に額田町最初のプール完成

兵藤(旧姓前畑)秀子氏が泳ぎ初めを行う…5

下山中学校を閉校し、新額田中学校に統合

外山で土地改良モデル事業が始まる

小学校校舎を改築し、現在の鉄筋校舎を竣工する

中伊西に額田北部工業団地が操業を開始

社会体育施設の下山地区体育館が完成

小学校が開校130周年を迎える

市町村合併特例法により、額田町と岡崎市が合併し新岡崎市誕生

ささゆりバス(コミュニティバス・下山地区線)の運行開始

豊田・岡崎地区研究開発施設用地の造成事業が始まる



新村は保久、雷尾、蘭(あらさぎ)、田折、田代、蕪木(かぶらき)、外山、一色、中伊で構成

この年に保久、一色、外山の消防組を設立しました



戦後の昭和21年には青年団と婦人会が再結成されました

蘭、田折、田代、蕪木は東加茂郡下山村に編入されました

この年、下山小学校に旧校訓「心カラセヨ」の碑を建立



山下氏と石川氏

室町時代に下山郷は山下氏の所領であり、保久に城(砦)がありました。寛喜年間(1229〜1232)に下野国古川(現在の栃木県)から山下義通が三河に入り、初代保久城主となりました。山下氏は足利將軍の奉公衆として中央で勢力を伸ばす一方、三河四翼の一角を占め、中山七ヶ村(現在の市東部乙川流域)に君臨しました。1461年(寛正2)には、重久が大給の長坂氏、岩倉の戸田氏とともに松平信光と円川で戦い、山下氏は滅びました。しかし、その子重勝と重仲は「築瀬」と姓を変え、世を忍んで暮らしたといわれています。

郷榮会について

明治41年2月、「村民ノ幸福利益ヲ増進…自治ノ本旨ヲ遂」を目的に設立された自主組織。村長の浅見浅次郎が提唱し、吏員、区長、議員、教員など、いわゆる村の有力者が構成され、産業振興、風俗矯正、敬神愛国、学事普及相互扶助、勤儉貯蓄など、住民生活の各般に亘る勸奨実行を目標として結成。これ以降、村内には風俗矯正会、戸主会、同仁会、青年会、処女会、母会などを順次結成。組織が強化され、後の自治運営の基礎となりました。

COLUMN 村報『郷榮』…3

築瀬民松郎村長の発案で発行された公報。提案、提言、詩歌、随筆や、戦地からの便りなども掲載され、さながら文芸誌の趣すら感じられるものです。当時、他の町村には例を見ない先駆的な試みであったと思われる。そこには住民に自主自立・自治の意識を高める効果もあったようです。昭和10年10月から合併閉村の31年9月まで発行され、平成17年には全巻が復刻出版されました。

村報『郷榮』の第1号



DATA



□人	646人
□男性	326人
□女性	320人
□世帯数	247世帯
□面積	15.05km ²

[2016年7月1日現在]

里山の風景と歴史を巡る

下山まちものがたりマップ

野山に咲く花、吹き渡る風、鳥のさえずりから四季を感じられ、地域交通「ささゆりバス」がのどかに走る山間の集落。その歴史は古く、室町時代から明治時代までの貴重な史跡も点在しています。現在工事中のトヨタテストコースには地域活性化への期待が寄せられています。



南側から見た完成予定のテストコースのジオラマ

トヨタテストコースとは…

岡崎・豊田両市域にまたがる約660haの敷地に建設予定のトヨタ自動車(株)の研究開発施設。平成19年に始まった内陸工業団地開発事業で、県企業庁により平成37年の供用開始を目指して造成工事が進められています。



保久川沿いの桜並木
約500mにわたって見事な花を咲かせる桜。約30年前に地元有志が植栽



中伊のビュースポット
中伊町入坂地内の東方遠望。本宮山や四季折々の眺望に癒される



七ツ蔵窯(炭焼きの森)
市環境共生育成拠点。本窯やドラム缶窯で炭焼体験もできる



ささゆりバス
野山を縫うように各町を経由し、岡崎市街地へ通う地域公共交通。平日のみ運行

ささゆりバス運行路
古道



F 古道
昔の間道。「小さなまがのウォーキング」のコースになることも



E リンぼ館
旧下山村の保健医療施設を復元した地域活動の拠点。レトロな建物



D 山下家墓所(市指定文化財)
室町時代の保久領主・山下家の墓。墓石に関東型と三河型がある



C 保久八幡宮
明治29年の建築。回り舞台や太夫座のある農村舞台は市指定文化財



B 保久陣屋跡
1651年(慶安4)から幕末に三河32か村を所領した石川氏の陣屋跡



A 庚申塔
三猿を彫った石碑と椎の木が目印。保久-富尾間の旧道の峠にある

小さくても大きく輝く

下山の魅力

岡崎市47学区のうち、人口最少の下山学区。ここには人の営みと自然が調和した暮らし、歴史文化を象徴する酒蔵、地域ぐるみの教育、活発な地域活動などがあり、小さいながらも魅力にあふれています。



里山の暮らし

標高約350mのなだらかな山間に位置しながら、市街地まで約15kmという生活環境も魅力の下山。夏は朝日が照らす乙川の川霧、冬は酒蔵の蒸気が覆う山並みなど、四季折々の情景が広がります。ここでの生活の醍醐味といえば「自然との共生」と「人と人とのつながり」にあります。住民の多くは田畑を持ち、山の恵みもいただきながら自給自足の知恵を引き継いでいます。また、ここには「結返し（ゆういがえし）」方言では、「いいがえし」という言葉が残っています。これは「田植えを手伝ってもらったら稲刈りでお返しする」といった、人の優しさに気持ちで応えることを表現する言葉です。周囲を気遣いながら協力する団結力も下山の伝統なのです。今日も地域のとある家庭では、朝採れの山の幸や、おすそわけの野菜が食卓に並びます。こうして自然と人のぬくもりを感じられる里山の暮らしが守られています。

長興寺住職 杉浦立美さんのお話
わずか7集落の小さな学区ですが、住民は自主・自立の気概と共助の気持ちを持って慎ましく生活しています。一人ひとりの自立が「輝き」であり、それらの集まりが「大きな光」を生んで地域全体を照らすことが里山の暮らしであり、その理想を胸に地域の持続を願っています。

老舗の酒蔵

1830年（天保元年）創業。岡崎最北の山里に江戸時代より蔵を構える柴田酒造場。所在地名でもある神水（かみづ）を仕込みに、熱心な蔵人たちが代表銘柄「孝の司（こうのつかさ）」を醸（かも）しています。現在は日本にとどまらず、海外にも出荷されるようになり、幅広い層に「孝の司ファン」を増やしています。



軒先に杉玉が吊るされる店舗



丹精込めた酒造り

柴田酒造場 柴田秀和さんのお話
明治時代に当家が東京に進出した際、酒造を絶やさぬようにと地元有志4人が山保合資会社を設立して守ってくれました。地域に愛されてきた酒蔵として、今後も日々精進していきます。

季節のイベント

春 桜を愛でる会

樹齢300年の山桜を愛でる春まつり。毎年4月第2日曜に開催され、約600人が観て、食べて、飲んで楽しむ観桜会です。ステージでは三味線や太鼓などの音楽演奏や踊り、小学生のクラブ紹介や合唱を披露。バザーでは地元の山菜、野菜、地酒などが好評です。また風流な野点席も人気があるほか、還暦を迎えるみなさんによる餅投げなどで大いに盛り上がります。



主催者から
初めてこの地を訪れた人、久しぶりに再会するふるさとの友、子どもからお年寄りまで笑顔があふれます。桜に集う素晴らしい会に、ぜひお越しください。

秋 小さなやまがのウォーキング

「下山の秋」を山歩きで満喫する地域の一大イベント。11月の最終日曜に開催し、毎年、約5~10kmのコースを設定。黄、赤、緑の色合いが美しい紅葉のほか、近世の古道や農村舞台などの史跡も見どころです。会場では小学生が作ったお米、野菜などの特産品が並ぶバザーや抽選会なども実施。約300人の参加者が、のんびりとした里山の休日を楽しんでいます。



主催者から
下草刈りや倒木除去で道を整備し、地域をあげてお迎えします。地元の人でも減多に行かない山道を歩く面白い経験ができます。下山名物もありますよ。

豊かな自然環境

下山の自然環境は地球規模でも誇れるものです。日本固有種で絶滅危惧種であるホトケドジョウなども確認されているほどです。また野に咲く可憐な花々、庭先に舞い降りる野鳥、瞬く満天の星など、当たり前のようにある自然を地域の人々は大切に思っています。



ササユリ



ホトケドジョウ

保久町

星野光弘さんのお話
岡崎市は望ましい森林の姿として「めぐみ、うるおい、やすらぎが共生する岡崎の森」を掲げています。すでにその条件がそろった下山では、贅沢なまでの自然環境の中で生活しています。

人とつながる教育

地域の子どもが通うのは、全校児童20名の、市内で一番小さな下山小学校です。自然を生かした交流活動が盛んな下山小では、地域の人たちも学校行事に積極的に参加しています。学区全体で家族のように子どもたちを見守り、地域ぐるみで子どもたちの自立心を育んでいます。

地域のおじいちゃん、おばあちゃんに手伝ってもらい、10aの田んぼで米作り



下山小学校 平木教頭先生のお話
都市部の学校との交流など、多様な個性とふれあう活動に力を入れています。また小規模を生かし、全児童が放送当番や司会など校内で役割を担うので、伝える力や責任感が育ちます。